

香取遺産

Vol.35

「全国からの寄付で建立」 伊能忠敬の銅像



▲春には、桜の花の中にたたずむ銅像が見られる

佐原駅から南へ400mほど歩くと、諏訪の山のふもとにある佐原公園に「伊能忠敬銅像」があります。

台座の高さ約5.5m、像の高さ約3.3m。脇に角度を測る方位盤を据え、右手に筆、左手には測量データを記録する野帳（やちょう）を持つ、測量中の姿をした立派な銅像です。

作者は日本近代彫刻の先駆者として著名な大熊氏（おおくま）氏によるもので、彼の代表的な作品には「有栖川熾仁親王像」や東京国立博物館表慶館正面の「ライオン像」など100を越えます。そして石の台座には、漢学者として有名な塩谷青山による「仰瞻斗象 俯画山川」（天体を観測し、地図をつくる）と刻まれています。

銅像は、大正8年に当時の佐原町有志により建立されました。当初5万円の寄付を全国から集めて、記念文庫と銅像を建てる計画でしたが、寄付は2万4000円にとどまり、記念文庫建設は断念。銅像だけを建て、残りは植樹や維持管理のため町に寄付をしました。

寄付者名簿から、個人・会社・学校など約1800件、5円未満の寄付者は省略とあるので、おそらく2000件を超える寄付が集まったと思われる。

北は青森県、南は鹿児島県、さらに台湾からの寄付も記録されています。このことから、伊能忠敬の名前が全国に広く知れ渡って

いたことが伺えます。

銅像建立の発端は、忠敬没100年（大正7年）を記念して企画されたものでしたが、それ以前に忠敬に関して、国定教科書修身に掲載（明治37年）、東京帝国大学卒業式で伊能図や測量器具を天皇陛下が天覧（明治42年）、帝国学士院での本格的な調査結果の出版（大正6年）など、脚光を浴びてきたこともその背景にあったと思われます。

除幕式は大正8年3月2日。1500人以上の人が集まり、盛大に執り行われました。その後、戦時中の金属回収にも遭わず、90年以上にわたり公園の一角で、今も静かに街を見守っています。